

# 同朋学園における幼大連携

—— これまでの経緯と新しい生活様式における幼大連携の試み ——

疇 地 希 美  
馬 越 恵 子  
吉 田 とき枝  
渡 邊 陽 子

## 要旨

同朋幼稚園は同朋大学の附属園ではなく、学園内の一つの機関として独立している。しかし、同朋大学と同一敷地内にあることから、幼児教育実習や研究などを連携して行うことで幼児、学生それぞれの教育的効果が上がるとともに、各教員の質の向上にも資することが期待される。同朋大学と同朋幼稚園のそれぞれの歴史は古いが、記録からはこれまでの関わりは比較的短く、組織的・計画的な連携は手探りで始めたばかりであることが判明した。

2018年度に発足した幼大連携ワーキンググループでは、2020年度から本格的に学生主体の保育実践やボランティア活動、各ゼミによる実践研究活動等始める予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大によりその予定も中止となった。しかし、3年ゼミで新しい生活様式における幼稚園との関わりをテーマに実践研究を行うことができた。

本稿では、これまでの連携について振り返るとともに、コロナ禍における今年度の連携の試みについて報告する。またそれらを考察し、今後の同朋学園における幼大連携の可能性について言及する。

キーワード：幼大連携、幼児教育実習、実践研究、保育活動、幼児教育

## 1. はじめに

附属幼稚園を擁する他大学では様々な幼大連携に関する研究が長年にわたり行われてきた（岩本ら、2005；鳥海ら、2010；鳥海ら、2011a；鳥海ら、2011b；橋本、2018）。山梨大学人間科学部は過去5年間の附属4校園との連携活動を振り返る3本の紀要論文の中で、教育実習における連携を分析し、教育実習は実習生と指導教員の両者に理論と実践を結びつける場であり、適性を確認する場であると結論づけている。このことから、教育実習が幼大連携における重要な役割を果たすことが確認できる。

学生の主体性を生かした研究面における連携としては、インターンシップ制度を活用した幼大連携における取り組みが報告されている（橋本、2018）。また、大学の授業科目に幼大連携の活動を取り入れることにより、学生が主体的に学修することができた事例も報告されている（岩本ら、2005）。

同朋幼稚園は、1952年に近隣地域の要請を受け総定員数300人で現在地に設立された。当初は大学の敷地内にあったため、「東海同朋大学附属幼稚園」としてのスタートであった（『同朋学園七十五年史』、1996）。その後、1953年に同朋幼稚園として愛知県からの正式な設置認可を受け、同朋学園の一機関として現在に至る。

同朋大学は1950年に現在地にて東海同朋大学として定員数160人で開設された。1959年には「同朋大学」と名称変更し、1968年に保育課程を開設し保育資格（のちに保育士資格）を付与できるようになった。保育課程は、2005年に幼児福祉専攻として、保育士資格と共に幼稚園教員一種免許状を付与できるようになった。これに伴い同年から教員免許状取得のために、毎年多くの教育実習生が同朋幼稚園で教育実習を行うことになった。

同朋幼稚園は、2009年に同朋大学の「幼児福祉専攻」が「子ども学専

## 同朋学園における幼大連携

攻」と名称変更以降に、一時「同朋大学附属同朋幼稚園」として、大学からの運営費を加えて園経営をしている時期もあったが、2015年からは再び「同朋幼稚園」として同朋学園の一機関として独立した園経営を行い現在に至る。

2009年以降は、教育実習を軸に幼稚園と大学が関係し合いながら歴史を歩んだ経緯があるが、教育実習以外の関わりについては、2015年以降に始まったばかりである。同朋幼稚園と同朋大学、名古屋音楽大学は隣接地であるという好条件を生かし、さらに名古屋造形大学は同じ学園内というつながりを生かして、それぞれの教育の向上を目標にした更なる連携が可能であると考えられる。

本論ではこれまでの学園内の幼稚園と大学のつながりを振り返りつつ、互いの教育力を上げる連携について考察していきたい。2020年度、新型コロナウイルス感染症拡大とその後の「新しい生活様式」における学園生活を受けて取り組んだ活動について報告するとともに、今後の連携の在り方について考えていく。

## 2. 幼稚園と学園他機関の連携について

### 2.1. 同朋幼稚園と同朋大学との連携

#### 2.1.1. 幼児福祉専攻設立前の連携

『同朋学園七十五年史』（1996、以下『七十五年史』と表記する）によると、同朋幼稚園と同朋大学の両機関は、設立当初は同一敷地内のため、大学の教室を保育室として使い、運動場を共用していた。また周年行事は学園として行われており、10周年の記念行事は、同朋大学、同朋高校、同朋幼稚園の三機関合同の式典として行っている。

30周年記念行事では、名古屋音楽大学の成田錠一講師を招いて講演会を催している。創立40周年を記念して作られた「同朋幼稚園のうた」の作曲は名古屋音楽大学小桜秀爾教授によるものである。この40周年の記

念式典第二部の「みんなでうたおう」には、協賛出演で名古屋音楽大学の  
大野恵子教授による独唱会を音楽大学の4年生の伴奏により行っている。  
学生を主体とした共同行事として、同窓会において1959年に同朋大学視  
聴覚部の学生による人形劇を同朋幼稚園で行ったとの記述があった。

『七十五年史』に記載されている上記にあげた記述から、大きな行事の  
際に学園内のつながりを生かして催し物を行ってきたことが明らかとなっ  
た。

## 2.1.2 幼児福祉専攻設立後の連携

### (1) 幼児教育実習の受け入れ園として

2005年に幼児福祉専攻が設立されると、幼稚園教諭1種免許状取得の  
ための教育実習の受け入れを通して同朋大学と同朋幼稚園の関わりは一挙  
に密接になった。幼稚園教員免許状取得を目指す学生は、表1のように推  
移している。2009年に幼児福祉専攻を「子ども学専攻」と名称変更する  
ころから、一般で言う「大学附属幼稚園」のように、教育実習の場として  
の幼稚園という位置付けを強くしていく動きがあった。そのため、2011  
年4月から2015年3月までの4年間、同朋大学附属幼稚園としての園経  
営を行っていたことを、前同朋幼稚園園長兼同朋大学教員である丹羽丈司  
教授は証言している。

教育実習生の受け入れ当初から、幼稚園で受け入れ可能な時期や人数を  
考慮し、5日間（1週間）の「幼児教育実習Ⅰ」（カリキュラム上は2年次  
で実施）の履修者をすべて受け入れていた。しかし、附属幼稚園としてス  
タートした2011年には41名の実習生がおり、幼稚園の受け入れ態勢を超  
える人数に至り、実習先の検討がなされることになった。その結果、2012  
年以降の「幼児教育実習Ⅰ」については、同朋幼稚園だけでなく、他の近  
隣幼稚園にも分散して実習を行うようになる。そうした経緯から、いった  
んは附属幼稚園として運営を始めたが、実習の受け入れについては同朋大  
学の実習生のすべてを受け入れることは難しいなどの課題が生じ、附属幼

## 同朋学園における幼大連携

稚園としての歴史は4年間で幕を閉じた。その結果、2015年には同朋幼稚園として、学園内の一機関としての運営に戻るることとなる。

附属幼稚園であった4年間の両機関の関わりについて振り返る資料は発見されなかった。また、当時在籍していた教職員も学園を離れており、証言を得ることはできなかった。しかし当時の状況から、附属園の機能とし

表1. 幼稚園教諭1種免許状取得希望者数と実習園について（入試広報室、学務課調べ）  
単位は人

	年度	子ども学専攻 入学者数	幼稚園教諭1種 免許状取得希望 者数（一年次）	同朋幼稚園での 実習者数		他園での 実習者数	
				実習Ⅰ	実習Ⅱ	実習Ⅰ	実習Ⅱ
幼児 福祉 専攻	2005	34	15	—	—	—	—
	2006	36	32	31	—	0	—
	2007	39	19	40	—	0	—
	2008	36	15	28	0	0	15
子ども 学専攻	2009	46	17	16	0	0	36
	2010	50	29	13	0	0	21
	2011	61	32	41	0	0	13
	2012	52	30	22	0	21	19
	2013	62	35	20	0	19	29
	2014	60	37	27	0	17	32
	2015	60	19	20	0	25	32
	2016	51	19	11	1	17	35
	2017	56	49	11	1	15	38
	2018	44	36	19	1	13	19
	2019	56	43	21	3	15	18
	2020	46	31	16	1	12	25

- ・子ども学専攻入学者、幼稚園教諭1種免許状取得希望者数は1年次の人数を示す。
- ・実習Ⅰ：「幼児教育実習Ⅰ」は観察を中心とした5日間（1週間）の実習、2年次で実施
- ・実習Ⅱ：「幼児教育実習Ⅱ」は責任実習を含む15日間（3週間）参加実習、4年生で実施
- ・グレーの網掛け（2011～2014年）は附属幼稚園だった期間を示す。

て、多くの学生の実習を受け入れてほしい大学側と、それを受けきれない幼稚園側の思いが錯綜していたことが推測される。そのため、それぞれの教育内容についてまでの踏み込んだ意見交換などはないに等しい状況であったことも推察される。

2015年に同朋幼稚園として再スタートした後は、学生ボランティアの受け入れが始まり、幼稚園と大学の距離は縮まってきた。

さらに、2019年に公立幼稚園長経験者かつ大学教員である馬越恵子特任講師を園長に迎えたことで、幼稚園の保育内容と大学の実習指導がつながり、大学の学びと幼稚園での教育内容が効果的に関連しあって双方の教育効果を上げるようになった。このことは、同朋幼稚園で教育実習を行う学生が記述する実習日誌への担任の書き込みや、学生の記録の書き方の成長ぶりから確認することができる。

## (2) ボランティア活動を中心とした連携

2015年に子ども学専攻の教員である丹羽丈司教授が園長に就任するまでの学生によるボランティア活動についての記録は残っていない。それまでは教育実習の連携についてのみ記録が残されている。しかし、同一キャンパスであるという地の利を生かし、学生にもっと身近に子どもと接する機会を増やし、学生にとっても幼稚園にとっても有意義な方法として様々なボランティア活動が行われるようになった。例えば、登園や降園の際に子ども学専攻の学生がボランティアとして保育補助を行うようになるなど、学生が幼稚園に関わる機会が積極的に作られるようになった。表2に2015年以降の同朋大学と同朋幼稚園とのボランティア活動における関わりを示す。

ボランティア活動が始まった最初の2年は、教育実習に付随する形で運動会の運営補助に学生が入る形で行われた。2017年からは子ども学専攻のゼミ担当教員を窓口として、幼稚園から学生にボランティアを依頼するようになった。当初は一部の教員からゼミ生への依頼として始まったが、

## 同朋学園における幼大連携

2019年からは公募として、ゼミや学年の関わりなく、ボランティア活動へ興味を持った学生が参加できるようにした。そして、窓口を地域連携担当の教員とし、園長・教頭と連絡を取りつつボランティアを募る体制が整えられた。子ども学専攻の教員にはボランティア学生の募集に当たって、学生への周知などに協力を求めた。

行事運営補助については、運動会や秋祭りなどは教育実習の直後であることから、実習生がそのままボランティアに参加する例が多かった。登園ボランティアについては早朝であるため、学生にとっては行動し辛い時間帯である上に、大学の1限の時間帯と重なるため、授業履修の関係で参加者の少ない曜日が出てくるなどの課題が残る。

2020年度は、ボランティア活動は新型コロナウイルス感染症の影響により休止となった。また、ゼミ活動や授業等でピーターパンクラス（預かり保育）を訪れることも同じ理由により中止となった。

表2. 同朋大学と同朋幼稚園との関わり（ボランティア活動）

年	学生と幼児の関わり	備考
2015	ボランティア活動（運動会の運営補助）	運動会前の教育実習生が行う
2016	同上	同上
2017	ボランティア活動（登園降園補助）未就園児教室にゼミ生が参加	ゼミ単位でボランティア参加の呼びかけ
2018	ボランティア活動（登園補助・お泊り保育）	同上
2019	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア活動（登園補助、七夕、お泊り保育、運動会、秋祭りなどの行事運営補助）</li> <li>・ゼミ活動として、保育活動と実践研究をする。</li> <li>・教員による絵本を基にした演奏会の実施。</li> <li>・キャリア支援としてOGによる講話を聴く。</li> </ul>	地域連携担当教員の取りまとめで、ボランティアを公募方式とする。
2020	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習指導として、幼稚園教員の講話を聞く。（幼児教育実習指導4）</li> </ul>	新型コロナウイルス感染症の影響によりボランティアを一時休止

(3) 学長発案による幼稚園と大学の連携ワーキンググループの発足

2018年8月、学長の提案により同朋大学子ども学専攻教員と幼稚園教諭による幼大連携ワーキンググループが発足した。

構成メンバー、第1回の会議の内容は図1の通りであるが、出席者それぞれが子ども学専攻と幼稚園との連携の意義や必要性を感じており、まずは何ができるかを考えあわせ連携の可能性について話し合った。

この時の話し合いがベースになり、翌年から以下のような実践が生まれた。会議の内容に沿って記載する。

① 幼児教育実習の充実について

このことは、幼大連携の中心となることであり、前出の2.1.2 幼児福祉専攻設立後の連携(1)で先述した通りである。

② インターンシップの創設について

2019年度は、ボランティア活動の充実に取り組み、インターンシップ制度については今後の課題となっている。

③ ボランティア活動について

馬越特任講師が2019年度に園長に就任し、ボランティア活動について綿密な連携ができるようになり、ボランティアの各活動内容がさらに充実した(表2)。

④ 子ども学専攻の教員との共同研究について

本稿がこれにあたる。これまでのつながりをまとめることで、今後の取り組みが明確にすることができた。

⑤ オープンキャンパスでの同朋幼稚園の公開

2019年度の馬越園長の着任を機に始まった。8月のオープンカレッジで、キッズカレッジを遊戯室で開催した。2020年度も開催予定だったが、コロナ禍により中止となった。

⑥ 同朋幼稚園での学生によるキッズカレッジの開催について

2019年8月のオープンキャンパスでは、幼稚園の遊戯室で子ども



## 同朋学園における幼大連携

学の学生が未就園児親子を招きキッズカレッジを開催している場面に高校生に参観してもらった。この企画は、高校生にとっては子ども学の学びの一端を知ることができ、大学生活の具体的なイメージを形成する機会となった。また、参加した未就園児の保護者にとっても、幼稚園を知るよい機会となった。

2020年9月のオープンキャンパスでは、少人数ではあったが参加した高校生に、幼稚園参観と共に子ども学演習室での活動を紹介することができた。

- ⑦ 福祉臨床センターや心理臨床センターでの子どもの発達に関する支援や保護者の相談などの受け入れについて

この項目については残念ながらまだ具体的な動きに至っておらず、今後の課題となっている。現在臨床センターが博聞館の5階に位置するなど、保護者にとって心理的にアクセスしづらい場所にあることも課題である。

2018年の会議では議題にはなっていなかったが、連携メンバーである疇地講師のゼミを中心に、学生と園児との交流を中心とした研究活動が2019年度以降進められている。11月に3年生ゼミ、12月に4年生ゼミが「総合演習」科目の授業の一環としてピーターパンクラス（預かり保育）で保育活動と実践研究を行った。ゼミ活動の実践を行うにあたり、幼稚園との事前の連絡を円滑かつ確実に行えるよう「活動計画書」のフォーマットを作成した。これを基底とし、実践を振り返り、改善し、2019年度末の子ども学専攻会議で、ゼミや授業をピーターパンクラスの園児を対象に行う際に用いる「活動計画書」の様式が提案され承認された。このことによりゼミによる体験を通した学修活動が広がることが期待される。

そのほか、2019年度には同朋大学音楽科目担当教員4名で構成するグループ「みらい堂」による絵本の音楽会（2020年3月24日（火）13:00-、ピーターパンクラス（預かり保育対象児）、絵本の音楽会『てぶくろ』も開催した。

<p>幼大連携ワーキンググループ</p> <p>【構成メンバー】</p> <p>大学から：井上学部長（教授）、石牧学科長（准教授）、馬越特任講師、疇地講師 幼稚園から：丹羽園長（教授）、渡辺教頭</p> <p>【第1回会議の主な内容】2018.8. 於：博聞館会議室</p> <ol style="list-style-type: none"><li>① 幼児教育実習の充実について</li><li>② インターンシップ制度の創設について</li><li>③ ボランティア活動の推進について</li><li>④ 子ども学教員との共同研究について</li><li>⑤ 同朋幼稚園のオープンキャンパスでの公開について</li><li>⑥ 同朋幼稚園でのキッズカレッジの実施について</li><li>⑦ 福祉臨床センターや心理臨床センターでの子どもの発達に関する支援や保護者の相談などの受け入れについて</li></ol>
--

図1. 第1回幼大連携ワーキンググループ議事録の一部

## 2.2 名古屋音楽大学・名古屋造形大学・同朋高校との連携

### 2.2.1. 名古屋音楽大学との連携

2008年以降、大学生によるコンサートは年3回行われている。2019年度は、名古屋音楽大学演奏部を通して、6月にマリンバ演奏、9月に朋友会（母の会・PTA）主催の名音コンサート（オーケストラ演奏）、1月にミュージカルを鑑賞する会が催された。それぞれの演奏会の前には、園児の興味や発達を考え、曲目や演奏順など演奏会の内容の相談もしながら、園児にとって豊かな心を育てる貴重な機会となるように計画が進められた。

### 2.2.2. 名古屋造形大学との連携

名古屋造形大学と同朋幼稚園は陶芸作品づくりを介して協力を続けてきた。ここ数年は「アート体験」として、希望する親子を募り、9月の土曜日に小牧キャンパスまで出掛けて陶芸作品を作る催しを行ってきた。

幼稚園では毎年11月に行う作品展において陶器づくりとその展示を、

クラス担任の指導のもと業者から土粘土を購入して行っていたが、2018年度以降は、名古屋造形大学の社会福祉交流センターと連携をとりながら行うようになった。6月の父親参観日に名古屋造形大学技術職員の指導の

## 同朋学園における幼犬連携

もと年長組の親子で陶芸作品を作り、名古屋造形大学で焼き物として仕上げて頂いたものを11月の作品展で展示するようになった。

さらに2018年度の作品展には名古屋造形大学と協力し木工製作を行い、これは以降に続くワークショップから展開する作品展の先駆けとなった。2019年度の作品展からは名古屋造形大学教員によるワークショップで、さまざまな種類の昆虫をテーマとした作品づくりとその展示が行われた。2020年度は様々な種類の魚を、本物に近い形にレーザープリンターで取り取ったものに好きな色で塗り込んでいくという活動を始めた。

名古屋造形大学との連携で行う作品展となったことで、保育の指導計画にも新たな一面が見られるようになった。ワークショップで制作した作品を11月の作品展で展示を行うまでの繋がりの一つと捉え、作品展全体のテーマを考えた保育の指導計画を立てるようになった。また、これらの造形表現活動を大学と協働で進めるにあたり、幼稚園側から幼児の実態や、この活動を通して、豊かな感性や表現、言葉による伝え合い、協同性、思考力の芽生えなどを育みたいことを名古屋造形大学側に積極的に伝えるようになった。

### 2.2.3. 同朋高校との関わり

例年、同朋高校生のキャリア教育の一環として、同朋幼稚園で1日体験を行っている。幼児にとっては、大きなお兄さんお姉さんとのふれあい体験ができ、人と関わる力の育ちにもつながっている。

また、学園内に幼稚園がある環境を活かし、2019年には高校の家庭科の授業の一環として2・3年の生徒が体験授業として来園した。高校生が幼児の生活を実際に体験することで、子どもの遊びや生活、子どもから大人への成長過程に興味を持てる機会となった。

夏期保育中に行われる愛知県私立幼稚園連盟主催の高校生体験学習には、毎年同朋高校から5名～10名程の体験希望者があり、将来幼稚園教諭を目指す生徒の職業体験の場となっている。

### 3. 2020年度 同朋大学との連携の取り組みについて

#### 3.1. 新しい生活様式、コロナ禍における協働のあり方

2020年度に幼稚園が学园内他機関と協働を行う前提として、新しい生活様式に沿った保育環境を整える必要があった。そこで、まず幼稚園が行った対策について以下にまとめる。

##### 3.1.1 幼稚園が行った対策

###### (1) 臨時休園中の保育について

2020年3月より新型コロナウイルス感染症拡大予防に向け臨時休園とし、5月末まで約3ヵ月間休園状態が続いた。この間は、国全体が非常事態宣言により不要不急の外出を自粛するように求められた。そこで、各家庭にメールを活用した連絡伝達方法を確立するとともに、親子で楽しく過ごせるように、幼稚園教員が学年別に作成した製作教材を園児に郵送した。同時に、園から教材の作り方や学年ごとに楽しめるような発達にあったリズム遊びなどを動画にして配信した。その活動内容は幼稚園再開後にも引き続き指導計画の中に取り入れられていった。

また、その月の誕生児には、ペープサートなどの楽しい出し物を動画配信することで、誕生会として毎月お祝いするようになった。さらに大きな行事である卒園式は、短時間で人数制限をしながら園内で行った。一方、入園式は新型コロナウイルス感染症拡大の状況から実施できず、職員紹介を兼ねた動画配信となった。

###### (2) 幼稚園再開後の保育について

日常の感染症予防対策として、登降園は学年別に時間差をつけ、入り口を2か所に分けた。そして、毎朝の検温はもとよりマスクの着用、うがい・手洗い、消毒の徹底を図った。また3密（密閉・密集・密接）を避ける環

## 同朋学園における幼大連携

境の見直しとして、各保育室やトイレ前廊下などの床に、子どもがよく分かる色ビニルテープを目印として貼ることで、子ども同士の間隔をあける必要性に気付けるようにした。また、換気の徹底、消毒液・空気清浄機の購入など早急に対策を講じた。

行事については3密の視点から見直し、学年別に参観したり精選したりするなどの工夫を行った。

2学期の大きな行事である運動会については、園庭を人工芝にする改修を行ったばかりであったため、その紹介も兼ね、例年のように高校の体育館を使用するのではなく、園庭で行うことになった。戸外であり、換気の心配はないとはいえ、全園児と保護者が参加すると密集を避けられないとの考えから、学年ごとに園児や保護者を入れ替えての開催となった。さらに、園児の祖父母に対しては、総練習の日に来園・見学することで当日の密集を避けるよう配慮がなされた。総練習の日には、同朋大学4年生の馬越ゼミ生が行事の参観学習を行なった。

秋祭りについては、園舎内に多数の保護者が出入りすることで3密が避けられないことから、今年度は中止となった。

ここ数年はこの二つの行事に合わせて、その直前に教育実習を行った学生がボランティアとして行事の運営補助を行っていたが、今年度は運動会の縮小開催や秋祭りの中止に伴い、行事ボランティアも中止となった。

### (3) 学園内での協働について

新型コロナウイルス対策本部が2020年4月に立ち上げられた。同朋学園に属する5機関（同朋大学・名古屋音楽大学・名古屋造形大学・同朋高校・同朋幼稚園）が名古屋と小牧に分かれているキャンパスの枠を越え、一致団結して今回の新型コロナウイルス感染症に対応することとなった。8月末までに計17回の会議を行い、15の声明文を公表した。そこでは学園に属する全ての学生・生徒・園児の生命身体の健康と安全確保に全力を尽くすことを主眼において様々な対策が講じられた。

### 3.1.2. 大学が幼稚園に関して行った対策

同朋大学生が幼稚園へ立ち入ることをできる限り制限した。前期に幼児教育実習を同朋幼稚園で行った学生が1人いたが、実習1ヶ月前から毎日体温を記録した健康調査表を幼稚園へ提出し、合わせて行動記録も残すよう指導した。また、8月の「愛知県新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」発令を受けて、後期に予定していた幼児教育実習の時期を1か月延期した。さらに、2020年度はボランティア活動を全て中止し、ゼミ活動など大人数での訪問も中止となった。

### 3.2. 教員による連携活動

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、前年度までに準備を進めていた幼大連携の計画は、幼稚園教育実習以外全て中止となった。同朋大学音楽科目担当教員が構成する音楽グループみらい堂による絵本の音楽会『スイミー』が6月4日木曜日午後1時から予定されていたが、遊戯室に全園児が集まることは難しく、また幼児の音楽会は観客となる園児も歌で参加することが予見できることから中止となった。その代わりに、自粛期間中に幼稚園で行っていた動画配信型保育「おうちえん」のコンテンツの一つとして、みらい堂の絵本の音楽会を幼稚園教諭たちが録画・編集したものを配信した。動画撮影は2020年5月28日木曜日13:00-14:00に、同朋幼稚園遊戯室にて大学教員と幼稚園教諭の協働で行われた。撮影に際し、園児が見やすい画面の構図を、ソーシャルディスタンスを考慮しつつ、幼稚園教諭らが主となり展開する形で行われた。絵本のストーリーや世界観を伝えることを第一としつつ、楽器の演奏場面が子どもたちにも見えるような工夫が提案されたことから、幼稚園教諭たちがこの配信動画を登園開始後の日常の保育へつなげ、年間を通した保育の展開も見据えて取り組んでいる様子が伺われた。

### 3.3. 2020 年度前期同朋大学 3 年ゼミ「総合演習 I G」による連携

#### 3.3.1. 「総合演習 I G」：塗り絵アートプロジェクト

2020 年度から開始を予定していたピーターパンクラスでのゼミ生による保育の実践・研究活動の実践が新型コロナウイルス感染症の影響により中止になったことから、新たな形式による幼大連携の模索が必要となった。また一方で、子ども学専攻のゼミは 2020 年度には幼稚園だけではなく地域の NPO との連携活動等にも取り組む予定であったが、それらも全て中止となっていた。

そこで、2020 年度前期の 3 年生ゼミの科目である「総合演習 I G」の授業において、「今、私たちにできることを探し、実行する」をテーマにゼミ活動を行った。このテーマにより、履修していた 5 人の学生は大学に所属する者として、近隣社会の特に幼い子どもとその家族に「with コロナ」の世界で生きていくのに必要とされる物事を考え、企画し、実行することが求められた。そこで生まれた学生らによる地域連携企画「みんなで虹を作ろう！ぬりえでモザイクアート大作戦」を一部改変し、同朋幼稚園との連携で実践することとなった。

2020 年度前期の授業は遠隔授業で始まったため、Microsoft Teams のビデオ会議とノートブック、パワーポイントの共有等の機能を利用するなど、ICT を活用して行なわれた。6 月下旬までは学生のキャンパスへの入構が制限されていた期間でもあったため、コロナ禍における大学と幼稚園の協働や子育て支援活動を含めた近隣社会と協働の在り方について、インターネットを活用し資料を集め、検討を行なった。そこで得た知識を元に、同朋大学のゼミ活動として実現可能なプロジェクトの企画書作りに取り組んだ。

学生は Teams 上でパワーポイントを共有し、ビデオ会議機能を利用して討議しながら活動を進めた。対面授業開始直前にあたる 6 月 18 日の授業で、ゼミ生 5 人で作り上げた企画を発表した。学生の作成した企画では、同朋幼稚園を含めた近隣地域の子育て中の家庭と高齢者を対象としたもの

であった。活動の内容は、自粛期間中に各家庭で行えるもので、かつ完成した時に連帯感が味わえるもの、として「みんなで虹を作ろう!」と題したモザイクアートのプロジェクトであった。大学生が作った塗り絵を、印刷物とデータで作成し、実際に配布するだけでなくインターネットやSNSを利用して発信し、完成した塗り絵を集め、それをアプリを利用してモザイクアートにするという企画案であった。テーマにある「虹」にはコロナ禍においても明るい気持ちになれるように、という学生たちの想いが込められていた。しかし、この企画書を同朋大学教員で共有し検討した結果、パイロットスタディとして同朋幼稚園との連携で行うことになった。

同朋幼稚園年長組とピーターパンクラス（預かり保育）での実施が決定し、学生らが塗り絵の図案考え、子どもたちが取り組みたくなるモチーフとして「さかな」を題材に選んだ。大学で塗り絵の用紙を準備し、実際の塗り絵はクラスの担任による保育活動として行われた。年長組では7月7日火曜日の午前中に、ピーターパンクラスは午後幼稚園にて塗り絵が実施された。当日、ゼミ生1人が代表で幼稚園へ行き、活動の様子の記録のため写真撮影を行った（図2、図3）。同朋幼稚園・同朋大学共同プロジェクトでは学生が1人だけ幼稚園へ立ち入ったが、30分程度の短い滞在であり、教育実習生と同じく体温と行動記録を記した健康調査表を作成していた。



図2 学生による活動記録写真



図3 学生による活動記録写真



## 同朋学園における幼大連携

その後、大学の「総合演習 I G」の授業の他、ゼミ生が集まれる時に塗り絵を切り抜き、大きな虹になるように構成し壁面を作成した（図4、図5）。年長2クラスの塗り絵は全紙サイズ（788 × 1,091mm）四六版画用紙3枚の大きな虹の作品に、ピーターパンクラスの作品は同サイズ1枚に1匹の大きな魚として小さな魚の塗り絵を配置された作品になった（図5）。これは学生らが、小さな魚が集まって1匹の大きな魚を模して難局を乗り越切るレオ＝レオニ作『スイミー』の絵本を、コロナ禍を乗り越切るために学生と園児の協力で行うこのプロジェクトに合うものだと考え選んだ構図である。偶然ではあるが、6月初旬に同朋幼稚園のオンライン配信型保育である「おうちえん」に同朋大学の教員らが参加して作成した絵本の音楽会の動画で取り上げた『スイミー』とテーマがつながる形となった。

2020年度は大学キャンパスへの入構制限が行われていたため、壁面の掲示をバス通りに面した掲示板を4つ利用して行うこととしたが、これらを所有している部署が学園本部と名古屋音楽大学であったため、特別に5日間だけ許可を得て掲示することができた（図6）。掲示した壁面を多く



図4 学生による壁面製作

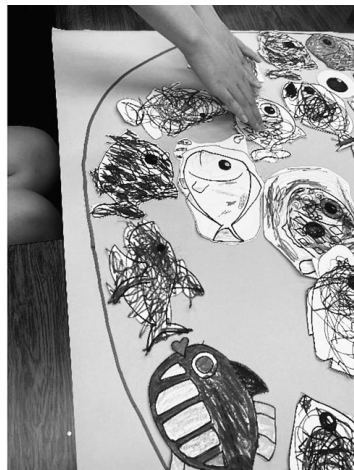


図5 学生による壁面製作



図6 完成した壁面の掲示

の人に見てもらうため、ゼミ活動としてこのプロジェクトのプロモーションビデオの作成も行った。学生らでプロットを考え、塗り絵をしている様子や壁面製作中の様子を納めたビデオとなった。また、この実践の振り返りを行い、実践報告書を作成した。

### 3.3.2. 塗り絵アートプロジェクト考察

#### (1) 大学側の視点

ICTを中心としたゼミ活動では、このプロジェクトを通し学生が得たことは多かった。

#### ・実践を通したICTの活用方法の習得

遠隔授業に伴い、Teamsにある様々なアプリを共有することで協働することができるようになった他、ビデオ制作のために録音のための機材や音楽編集アプリの操作、写真のコラージュや動画編集アプリの操作方法などを学ぶことにつながった。

#### ・大学が研究機関・地域に貢献のための機関であることを認識

新型コロナウイルス感染症拡大というこれまでに経験したことがない状況の中で、日本を始め世界の大学が一斉に始めた研究や新しい実践を調べ

ることで、自分たちも大学という研究機関の一員であり、新たな試みに取り組み実践と検証をすることが求められていることを認識するようになった。

- ・体験を通した実践研究の学修

自分たちが企画した活動を実践し、分析、考察を行うことで実践研究の一端を体験を通して学ぶことが出来た。ただし、この活動のさらなる考察は後期の授業である「総合演習Ⅱ」でさらに行う必要がある。

- ・グループによる協働、議論

収集した情報の共有や企画立案、活動の実践を通し、ゼミ生5人による討論を遠隔と対面の両方で重ねながら行っていた。場面に応じて適宜進行役や意見をまとめる役を代わるようになっていた。グループによる実践研究を通し、議論しながら活動を進めることができた。

- ・保育実技の知識や技能

塗り絵と壁面の製作だけでなく、プロモーションビデオ制作を通して動画の撮影と編集という新しい保育技術を得ることができた。また、塗り絵に関しては、同一年齢の集団で行う正規課程の活動と異年齢の集団で生活する預かり保育での活動では活動の雰囲気や完成する作品がより多様であるということについても学ぶこととなった。

- ・子どもの発達の実践学修

塗り絵という活動を通し、子ども達の発達についても具体的に知識を得ることにつながった。

授業の振り返りシートからも、学生が本活動を意欲的に捉えていたことが伺えた。子どもたちに直接会うことは出来なかったものの、一緒に作品を作り上げたという一体感を得たという意見があった。また、自粛期間であるため体験を伴った学修ができないと思っていたが、このプロジェクトを通し、直接対面することはないもの子ども達と関わりを持つことが出来たことを喜ぶコメントがあった。

学生だけでなく、大学教員もこの活動を通して新しい生活様式における

協働のあり方、幼大連携のあり方の可能性を確認することが出来た。

## (2) 幼稚園側の視点

以前から同朋幼稚園で ICT 教育として行っていた、アプリ「アートペン」を利用した塗り絵を応用した活動が、子どもが自身で水性ペンの色を選び、手を動かし色を塗る、という実体験を伴う塗り絵の活動に繋がった。タブレットで写真を撮り、それがアプリ上で示されたモチーフの色として反映されるという経験をしていた園児が、ボタンの選択で自動的に作品が出来上がってしまうのではなく、自分の手を動かすことで徐々に塗り絵が仕上がっていく、色を塗る途中で自分のイメージをさらに膨らませ、配色を考えながら思い思いの魚に作り上げていく体験をすることが出来た。この体験は 11 月に行われる作品展での製作活動へつながった（表 3）。

また、幼稚園教諭らもこのプロジェクトのモチーフが魚であったことに触発され、2020 年度の作品展全体のテーマを海の生き物とすることにつながった。この決定から、9 月 10 日に行われた名古屋造形大学教員によ

表 3. 幼稚園と大学との連携による長期間にわたる保育活動の繋がり

日程	幼稚園	同朋大学
5 月 14 日～		情報・資料収集と討論
6 月 2 日	絵本の音楽会『スイミー』配信	
6 月 4 日～		企画書の作成
6 月 18 日		企画のプレゼンテーション
6 月 25 日、7 月 2 日		塗り絵の作成
7 月 7 日	年長組、さかなの塗り絵実施	記録（写真撮影、1 名）
7 月 9 日～		壁面の作成
8 月 3 日～7 日	「みんなで虹を作ろう！」さかなの塗り絵プロジェクト壁面掲示	
7 月末		プロモーションビデオ制作
8 月上旬		活動報告書作成
9 月 10 日	名古屋造形大学ワークショップ	
11 月 3 日～5 日	作品展（テーマ：海の生き物）	



図7 作品展の様子、大学生と園児による塗り絵プロジェクトの壁面もプロモーションビデオと共に展示された



図8 名古屋造形大学とのワークショップで製作された作品の展示

るワークショップのテーマも海の生き物となった。幼稚園教員からの数多くの具体的な魚の提案を受け、名古屋造形大教員がデザインした魚をレーザープリンターで切り抜き、園児が学年別に様々な技法で着色する活動を行った。他にも海の中をイメージする共同作品の制作にも取り組んだ。結果として保育に連続性が生まれ、生活の中で遊びを通して学び、ひとつの形として作り上げる年間を通した指導を構成することとなった。

また、1名ではあるが学生が幼稚園を訪れ保育活動の記録を行ったことで、学生の学びになるだけでなく、幼稚園教員を含め園全体の教育活動の向上につながることも確認でき、これは新型コロナウイルス感染症終息後における、新たなボランティア活動、幼大連携活動としての可能性となることがわかった。

#### 4. 今後の取り組みに向けて

約70年にわたって、同朋大学、同朋幼稚園は同一敷地内にあるが、両者の関わりが密接になってきたのは最近であることが本研究を通して明らかになった。また、同朋幼稚園では、同朋大学だけでなく、名古屋音楽大学や名古屋造形大学、同朋高校との関わりも、学園のつながりを生かして

行われていることが分かった。

さらに今後の取り組みについても、幼大連携ワーキンググループが発足して具体的な動きが始まっている。これまでの連携の歴史を振り返ると、その時々に行われている連携を一過性のものでなく組織的なものにしていくことで、計画や改善を経てより良い活動となって定着すると考える。そのために、本稿で振り返ったこれまでの活動について精査し、今後は方向性をもって計画的に連携を深めていきたい。

その方向性として、教育と研究の2つの側面を意識した連携を考えていくことが重要であると考え。具体的な連携活動については、幼大連携ワーキンググループの会合においてすでに挙げられている通りである。

今後の連携を進めるにあたっては、幼児教育実習を通した連携を軸に置いて、大学教員と幼稚園教員が互いへの理解を深めることが基盤になると考える。互いの教育内容への理解の上に、大学の持つ資源である「学生への教育と研究を通した数々の知見」と、幼稚園の資源である「幼児の生活する生の姿の現場」を生かした互恵性のある連携活動を進めていきたい。

特に 研究面での連携において、両機関の教員が協働で取り組む幼児教育や保育活動の内容に関する研究が今後、不可欠となる。研究面においてもまた、第1に幼児教育実習における連携、第2に学生を主体とした連携が主軸になることが考えられる。

先行研究からも幼大連携の重要性が確認されている。これからの同朋大学において学生の主体性を生かした研究の側面における幼稚園との連携は重要事項となる。子ども学専攻では1年生から4年生まで全学年のゼミ活動において、グループや個人など様々な形で、また多様なテーマで研究を遂行することを課題としている。子ども学を研究することにおいて、実際の子どもの知ることは不可欠である。幼稚園との連携で、子どもの姿や育ちを実際に目にし、保育を実践することで学生自身が研究課題を見つけることが望ましい。また、研究が机上だけのものではなく、保育の現場で実践されることで、その結果が現実社会に役立つものとなることを学修する

## 同朋学園における幼大連携

こととなる。

幼稚園にとっても、保育の活動内容や教育に関する様々な研究を大学と協働で行っていくことは、幼稚園教諭の知識や技能の向上につながり、園としての教育力の向上につながる。そのためには、園児の育ちに資する連携を図っていくことが必須であり、大学と幼稚園どちらにも得るものがある、互恵性のある連携が条件となる。互いの教員同士が連携し合い実践研究を始めとする共同研究を進め、大学での研究成果や幼稚園での事例を交換することで教育力の向上が見込める。これらのことから、今後は研究面に主軸を置いた幼大連携をさらに進めていくことが課題となっている。

最後に、インターンシップ制度の実現や福祉臨床センターや心理臨床センターでの子どもの発達に関する支援や保護者の相談などの受け入れについては、今後の実現に向けた課題の洗い出しから進めていく必要があると考える。

### 参考文献

- 岩本廣美・前田喜四雄・比留間みどり・上野由利子・木村公美・原田真智子・竹内範子・長谷川かおり・山口智佳子. (2005). 保育参加による大学授業の改善—附属幼稚園との連携による「幼児と環境 2」の実践を通して—. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要、14、157-169.
- 鳥海順子・古家貴雄・谷口明子・角田修・長谷部美佐子・山本英寿・石井敬・手塚雅仁・青木洋子・澤登義洋・望月之美・泉晋一. (2010). 山梨大学教育人間科学部と附属4校園との連携に関する研究 I. 山梨大学教育人間科学部紀要、11、357-365.
- 鳥海順子・古家貴雄・谷口明子・長谷部美佐子・荻原ひろみ・古屋あゆみ・岡村太郎・風間俊宏・山本撰・大脇博・赤岡玲子・望月陵・手塚雅仁・青木洋子・金丸実奈江・花形章・角田修・石井敬・山本英寿・澤登義洋・望月之美・泉晋一 (2011a) 山梨大学教育人間科学部と附属4校園との連携に関する研究 II. 山梨大学教育人間科学部紀要、12、300-307.

疇地 希美、馬越 恵子、吉田 とき枝、渡邊 陽子

鳥海順子・古家貴雄・谷口明子・長谷部美佐子・荻原ひろみ・古屋あゆみ・風間俊  
宏・山本摂・大脇博・望月陵・手塚雅仁・青木洋子・金丸実奈江・花形章・角田  
修・石井敬・山本英寿・登澤義洋・望月之美・泉晋一・岡村太郎・赤岡玲子。  
(2011b). 山梨大学教育人間科学部と附属 4 校園との連携に関する研究 III. 山  
梨大学教育人間科学部紀要、13. 330-340.

橋本忠和。(2018). 教員をめざす学生のエンパワーメントを高める幼稚園と大学が  
連携した学校インターンシップについての一考察: 北海道教育大学附属函館幼稚  
園 "預かり保育" での表現活動を事例に. 北海道教育大学紀要. 教育科学編、68  
(2): 511-525.

同朋学園七十五年史編纂委員会。(1996.) 同朋学園七十五年史. 学校法人同朋学園.

## 謝辞

同朋幼稚園前園長の丹羽丈司先生には大学にお越しいただき、幼稚園に  
も大学にもまとまった記録のない『同朋学園七十五年史』以降の歴史につ  
いて教えていただきました。先生のお話で、同朋大学の子ども学専攻と幼  
稚園との関係について記述することができたことを感謝します。